

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：45206

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23710315

研究課題名(和文) 明治期女子教育の制度化に際する西洋科学思想の影響に関する研究

研究課題名(英文) Influence of Western Scientific Thought on the Systemization of Women's Education in Meiji Japan

研究代表者

渡部 周子 (Shuko, Watanabe)

島根県立大学短期大学部・総合文化学科・講師

研究者番号：70422582

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：

本研究は、明治期における女子教育制度の編成を、西洋科学思想の受容という視点から考察したものである。女子中等教育の理論的根拠となったのが進化思想であること、「就学、結婚、出産」という女子のライフコースの創出は、生殖能力の管理を通して、日本人種の改良を意図するものであったことが明らかになった。男女別学、男女別カリキュラムの構築は、民族の進化と生殖能力の「効率的活用」という、国民国家形成の目的に基づくものだったのである。

研究成果の概要(英文)：

This study examines the evolution of the women's education system during the Meiji period considering the reception of Western scientific thought. It has been revealed that the theoretical foundation for women's secondary education was an evolutionary thought, while the conception of a life course for women was characterized by "school, marriage, and childbirth." The primary aim was to improve the Japanese race through the management of their reproductive ability. Students were segregated based on gender, and their adherence to different curricula were founded on broad objectives of nation-state building - that is, evolution of the Japanese race and "efficient use" of the females' reproductive ability.

研究分野：ジェンダー

キーワード：ジェンダー 女子教育 西洋科学思想 明治 進化論 少女

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、「少女」期におけるジェンダー規範の形成について、継続的に考察してきた。

明治期の学校制度の確立によって就学期間が長くなり、生殖可能な身体を持ちつつも結婚まで猶予された期間が長期化した。この「生殖待機」期間を「少女」期と捉え、明治政府が「少女」に与えた良妻賢母となる上での準備教育を、教科書や教育論に見られるフレーベル、シラー、ラスキン等の西洋思想との関係から考察した。

その結果、女子教育論や高等女学校用修身教科書で、他者への献身を求める「愛情」規範、心身の清らかさを求める「純潔」規範、容顔の美しさを求める「美的」規範という、性差に固有の規範が与えられていたことを解明した。この成果は、『<少女>像の誕生』(2007年)にまとめている。

研究を進める過程で、西洋からもたらされた進化論に基づく科学思想が、女子教育の制度化に際する、理論的な支柱となったという仮説を抱くに至った。

### 2. 研究の目的

近代日本の女子教育において、「良妻賢母主義」が根幹となるイデオロギーであることは、深谷昌志『良妻賢母主義の教育』(1966年)、小山静子『良妻賢母という規範』(1991年)等が指摘している。

明治政府は国民国家形成の目的のもと、健全で頑強な人間をより多く再生産することで、労働力を増強し国力の強大化をはかろうとした。家族の構成員のうち、男性は兵士あるいは労働力として貢献すること、一方女性は子供を産み育て、労働による夫の疲労を回復させる「良妻賢母」として、間接的に国家に貢献することを求めた。

本研究は、明治期における女子教育の制度化に際する西洋科学思想の影響に着目することで、国民の再生産という目的のもと、女子の心身がどのように規定されたのかを解明する。

明治期において、白色人種を優等、黄色人種を劣等と位置づける進化思想を乗り越えるために、「日本人白人説」「混合民族論」等、様々な議論がなされたことは良く知られている(例えば小熊英二『単一民族神話の起源』1995年)。

日本国民の優秀さを保証することを意図する進化論の解釈として、先天的に劣等な身体を道徳性が補い、天皇への「忠君愛国」の精神、行動を競い合うことが、進化に繋がるとする「道徳進化」という思想を、一例に挙げるができる(鶴浦 1991年:141-142)。

では、第二次性徴期にあたる女子中等教育において、科学思想はどのような影響を与えたのだろうか。

西洋で発展した近代医科学は、性差によって男女の能力は異なると見なし、男性の能力

は女性に卓越していると位置付け、性差をめぐる科学を根拠に、男性支配が正統化されたことは、シンシア・イーグル・ラセットの研究に詳しい(Russett 1989=1994)。

日本における女性身体の病理化という問題に言及した研究は、川村邦光『オトメの身体』(1994年)、田口亜紗『生理休暇の誕生』(2003年)、田中ひかる『月経と犯罪』(2006年)等の研究がある。これらは、いずれも、月経の病理化を考察しており、明治期への言及はなされつつも、大正、昭和が分析の中心である。

これに対して、本研究は、西洋列強による外圧がもたらす危機意識を、国家による身体管理の大きなファクターと捉え、ゆえに明治期を重要視する。

本研究課題の申請時において、歴史認識の視点を共有する唯一の研究であったのが、加藤千香子による「『帝国』日本における規範的女性像の形成」である(加藤 2007)。加藤は良妻賢母主義を論じる場合、対外的な要因に視野が十分に及んでこなかったことを問題視し、日露戦争と第一次世界大戦との関係から分析する。さらに加藤は、「性差はどう語られてきたか」で、良妻賢母主義が性差にかかわる新しい「科学」によって、根拠を与えられ、補強されたことに着目する(加藤 2009)。ただし、明治期についての言及は30年代から末の短期間であり、この時期の教育家の著作については、下田次郎による『女子教育』(1904年)の検証に留まっており、具体的な資料の提示については、課題が残されている。

### 3. 研究の方法

明治期における女子教育制度の編成を、西洋科学思想の受容という視点から考察する。「2. 研究の目的」で挙げた先行研究を踏まえ、主に下記に挙げた点について、調査を進めるものとする。

- (1) 性差をめぐる科学思想の受容について、第二次性徴期の心身を医科学はどのように捉えたのかという点に、留意し考察する。
- (2) 高等女学校用修身教科書や教育論等の女子教育関係資料の文献調査を行い、科学思想の影響について分析する。
- (3) 挿絵等の図像資料において、どのように女子の心身は表現されたのかを考察する。
- (4) 以上の資料を総合的に解釈することで、ジェンダー秩序形成に関する新たな知見を提示する。

#### 4. 研究成果

調査の結果、女子中等教育の理論的根拠とされているのが進化思想であること、「就学、結婚、出産」という女子のライフコースの創出は、生殖能力の管理を通して、日本人種の改良を意図するものであったことが明らかになった。

男女別学、男女別カリキュラムの構築は、民族の進化と生殖能力の「効率的活用」という、国民国家形成の目的に基づくものであったということを解明した。

得られた主な成果について、以下で説明する。

##### (1) 研究の主な成果

###### ① 早婚否定論と女子教育の推奨

西洋からもたらされた進化思想に基づく医科学の学説では、日本人は劣等人種だと位置づけられていた。そこで、近代日本の医師たちは、将来の母体となる女子の心身を、改良すべく研究を重ねる。そしてまた、教育家は、医科学に依拠し、成長過程にある女子を訓育する。

女子教育の制度化にあたって、廃止すべき悪習と見なされたのが、早婚の慣習である。江戸期の日本において、社会の支配層である武士によって、早婚はむしろ社会規範に沿う行為として、推奨されていた（倉地 1998:145-146）。

ダーウィンは、『人間の進化と性淘汰』（1871年）で、成人に至るまでに受けた教育が女子の形質を決定し、またその形質は娘に遺伝すると主張する（Darwin 1871=2000:401）。この説に依拠するならば、早婚の女子は十分な進化を遂げることができず、子孫の能力を劣等とすることになる。

明治期に、このダーウィンの学説は、受容される。例えば、医学と教育の連結点である学校衛生を事例に挙げるならば、学校衛生の父と称されている三嶋通良は、早婚の女子は、教育上において「不行届」であり、妻となり一家を治める能力を持たず、また衛生上から見るならば、身体の発達が十分でないため、「強壯」な子どもを産むことができず、子どもの教育もできないと説いている（三嶋 1891:12）。

さらに、早婚否定論は、高等女学校用修身教科書にも記されており、明治政府は、学校での教育を通して、この説の普及に努めたことを、うかがうことができる。たとえば、『中等女子修身訓 三巻』（1905年）は、「早婚は其の身体を害し、其の子の虚弱なるべきこと明かなる道理なれば、害を子孫に及ぼし、終に国民をして柔弱ならしむ」（井上 1905:69）と記し、『新訂教科女子修身書 四巻』（1911年）は、「近来、年少にして、思慮未だ熟せざるに、早く己に結婚に就きて、思ひ煩ふ女子あり。こはまさしく、処女時代の進歩と、幸福とを阻害する所以にして、好ましき事にあらず」（下田

1911:41-42）と述べる。

日本の医師も教育家も、早婚の慣習を廃止すべきだと説いており、これは進化論の影響によると考えられるのである。

###### ② 女子教育制限説の展開

このように、女子教育を推奨しつつも、学校の目的は女子を将来の良妻賢母として育てることにあり、男子と対等な水準まで能力を伸ばすことを、意図したわけではなかった。

明治期において、女子の教育程度を制限する上で影響を与えたのが、男女の能力は、生来的に異なると見なす、西洋医科学による性差論である。西洋医科学は、「知性」において男子は勝り、高度な思考力と意志を獲得することができると思なした。一方、女性は豊かな感情を持つと位置付けられ、「愛情」「同情」は男子より強いと捉えた（Russett 1989=1994:59）。

帝国大学理科大学教授であると共に、東京高等女学校の校長を勤めた植物学者矢田部良吉による、1889年1月に大日本教育会で行った演説「女子教育の困難」の演説録を例に挙げ、教育界における西洋医科学の受容について確認する。

矢田部は、女子は「情緒即ちイモーションに関かへることは男子より鋭敏」であるものの、「智力即ちインテレクトに関かへることは男子の下」であり、また「女子の愛情の男子よりも切なるは其母となりて児を養育するに依て発達する所の情が遺伝となりたるに起りたるもの」と述べる（矢田部 1889:25）。

また、ハーバード・スペンサーは、人間が消費できるエネルギーの量を有限と見なし、大部分のエネルギーを種の再生産のために使わねばならない女性は、それ以外の活動や知的発達に割けるエネルギーの絶対量が少ないと捉えた（荻野 2002:210）。

矢田部は、先の演説録で、中等教育に学ぶ年齢に当たる女子が、男子と同様に「学問に従事」すると、「身体の発育に大害を起すこと」があり、それは「人体の滋養に限りある」ため、「生殖器関に充分の滋養を使用することが出来なくなる」からだとして記している（矢田部 1889:23-24）。それゆえに、「女子の修むべき学科の種類も修学の時間も男子とは幾分か異なるやうにすることが肝要」だと述べる（矢田部 1889:24）。

この主張は、エネルギー保存の法則に依拠していると考えられるのである。スペンサーの学説は、男女の教育機会の不均衡や、教育水準の制限に対して、正当性を与えるものであったと解釈できる。

###### (2) 得られた成果の位置づけとインパクト

明治期における女子教育制度の編成を、西洋科学思想の影響という視点から、考察するという問題設定は、独自性があると思われる。

女子中等教育に、進化思想が及ぼした影響

を明らかにした意義は、大きいと考える。

### (3) 今後の展望

また、当該研究を進める過程で、発展的な視点ならびに課題を得ることができた。

「4. 研究成果 (1) 研究の主な成果 (2) 女子教育制限説の展開」で、矢田部の演説録を例に挙げ説明したように、「愛情」を女性特有の感情と捉える医科学の学説は、明治期の教育界に受容される。また、矢田部は、同じ演説録で、女子は「容色も美しくあり且つ身体の装飾も上手」と述べている(矢田部 1889:27)。

「愛情」や「美」をジェンダー規範として分析する過程で、他者を「愛しい」という感情と、他者から見て「愛らしい」ことを意味する「可愛い」は、教育界に受容された女性の特質と、相関する部分があると捉えるにいたった(渡部 2015)。

本年度、最終年度となる当該研究課題から、「かわいい」をジェンダー規範であり、教育理念として捉えるという発展的な課題を得ることができた。

### <引用文献>

- Darwin, Charles Robert, 1871 *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*, London: John Murray. (=2000 長谷川眞理子訳『人間の進化と性淘汰 II』文一総合出版)
- 深谷昌司(1966)1998『良妻賢母主義の教育』黎明書房
- 井上円了 1905『中等女子修身訓 3巻』学海指針社
- 加藤千香子 2007 「帝国」日本における規範的女性像の形成 — 同時代の世界との関係から」早川紀代他編『東アジアの国民国家形成とジェンダー — 女性像をめぐる』青木書店
- 加藤千香子 2009「性差はどう語られてきたか — 世紀転換期の日本社会を中心に」宮崎かすみ編『差異を生きる — アイデンティティの境界を問いなおす』明石書店
- 川村邦光 1994『オトメの身体 — 女の近代とセクシュアリティ』紀伊國屋書店
- 小山静子 1991『良妻賢母という規範』勁草書房
- 倉地克直 1998『性と身体の近世史』東京大学出版会
- 三嶋通良 1891「女子の健康は国家の健康なり」『婦人衛生会雑誌』22(復刻:1990 大空社)
- 荻野美穂 2002『ジェンダー化される身体』勁草書房
- 小熊英二 1995『単一民族神話の起源 — 「日本人」の自画像の系譜』新曜社
- Russett, Cynthia Eagle, 1989 *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=1994 上野直子訳『女性を捏造した男たち — ヴィクトリア時代の性差の科学』工作舎)

- 下田次郎 1904『女子教育』金港堂書籍
- 下田次郎 1911『新訂教科女子修身書 四巻』開成館
- 田口亜紗 2003『生理休暇の誕生』青弓社
- 田中ひかる 2006『月経と犯罪—女性犯罪論の真偽を問う』批評社
- 鶴浦裕 1991「近代日本における社会ダーウィニズムの受容と展開」柴谷篤弘、長野敬、養老孟司編『講座進化2 進化思想と社会』東京大学出版会
- 渡部周子 2007『<少女>像の誕生 — 近代日本における「少女」規範の形成』新泉社
- 矢田部良吉 1889「女子教育の困難」『東洋学芸雑誌』88

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

渡部 周子、「かわいい」の生成 — 1910年代の『少女の友』を中心として、大阪国際児童文学振興財団研究紀要、査読有、28号、2015、pp.45-57

[学会発表](計3件)

①渡部 周子、近代日本における「少女」期の形成 — 西洋科学思想の受容という視点から、第52回文化社会学研究会、2014年3月29日、早稲田大学(東京都新宿区)

②渡部 周子、明治期女子教育における科学思想の受容 — 「生殖能力」の管理という視点から、ジェンダー史学会、2011年12月10日、明治大学(東京都千代田区)

③渡部 周子、感情のジェンダー化 — 近代日本の「少女」期を事例として、関東社会学会、2011年6月19日、明治大学(東京都千代田区)

[図書](計1件)

①岩淵宏子、菅聡子、久米依子、長谷川啓編、川原塚瑞穂、倉田容子、小林美恵子、高橋重美、武内佳代、中谷いずみ、沼田真里、橋本のぞみ、矢澤美佐紀、渡部麻美編集委員、渡部周子(他29人)、東京堂書店、少女小説事典、2015、377(344-346)

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

渡部 周子 (SHUKO, WATANABE)

島根県立大学短期大学部・総合文化学科・講師

研究者番号: 70422582